



ワ

キ

ス



タ

ガ

レ

執筆…河内 曾良  
制作…久留米躑躅

※本作は、お試し版です。多視点で書きました。

久留米躑躅



【窓付き日記】

小柄な少女、『窓付き』が目覚めるとそこは見たことのない不思議な世界が広がっていた……。

(1)

アニメに出てくる主人公ならこのような場面に出くわしたのなら何と言うだろうか……

私がいるのは、真っ白の世界と真っ赤な雪の中間点。

純白と紅花の紅。

この、似ても似つかない色どうしが重なり合って両色の境界でピンク色に光輝いている。

首都圏とはかけ離れ、建造物と呼べるものが一切見当たらない。それどころか、動植物がこの空間に存在しているのかもわからない。

まるで、この場面で生きているのが私だけのように感じる。

「私はどこにいるんですか…？教えてください。自分が知りたいですう…」

私は、自分の自分に問いかけた。

目を閉じて息を殺すと、辺がしんっ…と静まり返る。

その時に、自分の心の声で話しかけるのだ。すると、耳の奥でブワッと声が広がる。つまり、自分に話しかけている感覚に近いということだ。

「答えを教えてください。」

その声は、耳の奥だけにとどまり返答をしてくれない。幾度も訪ねては返答を待つ。

私は、誰でなぜここにいるのか。記憶がないにしても、ここにどのような経緯で到達したのか本当の自分なら、何か知っているかもしれないと思ったからだ。

私はゆっくりと歩きだした。見渡す限り、赤と白とピンクこの3色だけがぼんやりと光っている世界。歩けど歩けど変わらぬ世界。ため息の一つ一つが火を口から吐くように真っ赤に染まって真っ白の世界へと消えていく空気。下を見れば、白と反して真っ赤に染まった雪の地面。

はあ～全く先が見えないよお～

自分で自分の弱音を言い聞かせながら、重くなった足を前へと押し進めた。

自分でもわかるのだが、重くなった足は徐々に紅花色の雪にズリズリと埋もれているようだ。そのためか、白色の靴下は赤色に滲んでいる状態だった。

「いっ……！？」

なんだ……？

腕に痛みを感じた。感覚が麻痺しているのか、寒さは感じないのだが体は限界を訴えているといったところだろう。

「ヴウ……。」

モウヤダ！

そんなことをここで言っても仕方がない。

こんなことを自分に言っても仕方がない。

草木の一本、犬猫の一匹でも見つければいいのだが、やっぱりどこを見渡せど同じ景色に同じ背景色。先程にも言ったのだが、足が埋もれている。その深さは、もうすでに靴を飲み込むまでになっている。例えるならすすぎ畑に立っているカカシということになるだろう。

カカシは、ゆっくり風に押されて倒れ込むように歩く。

足が重い。痛い。辛い。なんでこんなことになったの……？誰か助けて。しんどい。眠い。何で……

歩き続けて、もう半日ほどになるだろうか。

徐々に眠さも増し、腕の痛みもひどくなってきた。

収穫は全くなく、歩けど歩けどそこにあるのは同じものばかり。

「ヴウウ……お腹すいたよお……」

私は、お腹を抑え真っ直ぐ雪の中に倒れ込んだ。

すると、赤色の雪はジャバツ！っと、音を立てて押しのけられた。

考えてみる。私という存在のことを。

覚えているのは名前だけで、あとのことは何も覚えていない。自分は誰なのか、何故ここにいるのか、そもそも人間なのか……？

考えるごとに、怖くなってくる。自分がわからないという恐怖は、何事にも例えることができないぐらい心の底でモヤモヤした怖さを持っている。

「私はどこにいるんですか……？教えてください。自分が知りたいです！」

「ハアハア…ウツ」

頭が働かない。息も切れてくる。

何故だろう…？

体が重い。動かない。

金縛りとも違う。

……あれ？いつの間にか、顔が隠れるまで雪に埋もれてた。もうここで、私死ぬのかな。未練もあったのかもわからないまま私ここで死ぬのかな？

目の前が暗い。

深い穴の中に放り込まれたようにテンっと光の粒がある。あそこまでたどり着けたのなら助かるだろう。ただ、深いとても深い……。

## 【窓日記】

中学二年生の『窓付き』は、ベッドの上で寝ている。

度々、顔をしかめては苦しそうにもがいている。

ちなみに、窓付きというのはこの子のあだ名である。何故このようなあだ名が付いたのかわかって……？それについては、あまり話したくはないのだが……今回は特別だよ。

それは、この子がいつも着ているピンク色の服（私服がこれしかないのだが）にプリントされている白と黒のしましま模様の窓が原因である。

その窓のプリントこそ僕だ。小学生のときからずっと窓付きと一緒に僕は、彼女ばかり見ていた。

だから、しばらくの間だけ僕視点で書かせてもらうよ。

さあて……窓付きが起きたようだね。

(1)

窓付きは、僕やスカートに皺を作って息を切らしながら体を起こした。

体を起こすと真っ白だったベッドがまるで赤いペンキを中央でこぼしたように血が飛びちっている。窓付きの僕から見た様子というのは、ヨロヨロになったゴキブリのようにまるで、生死をさまよっているといった様子だった。

「カッターナイフ……」

……ヴッ！

轟っ！と、音を立ててベッドから転げ落ちた。

「いつつつう。」

窓付きは、頭を片手で抑えながら机の上に置いてあったリストバンドに手を伸ばした。

「これで……いいかな？」

僕から見ても分かることだが、彼女自身ひどく弱っている様子である。僕は、服にプリントアウトされた偽物の窓な訳だが、部屋を見渡すと薄暗い部屋に本物の窓がひとつもない。彼女は自分が窺われている姿を鏡や窓で見るのを避けているのだろうと思う。

窓付きは、リストバンドを嵌めるやいなや、片手を天井に向かって広げて口を開いた。

「ねえ。あなたはと思う……？似合うかな。バレないかな？」

誰に話しかけているのだろうか。薄暗い部屋には誰もいない。

もしも、僕に話しかけているのだとしたら似合っているよ。そう言いたい。

彼女が、どれだけの境遇（それについては、後に話すことになるだろう）に置かれていたのかは僕だって知っている。だから、こういうことをしてもしょうがないと、そう思うようにしている。でも、本当はやめて欲しいという気持ちもある。彼女が傷つくところを見るのは、本当に心が痛む。

窓付きは、しばらく黙り込んだあとゆっくりと動き出した。

ベッドの上から掛け布団だけをはぎ取りリストバンドを隠すように体をそれで包み込んだ。

「寒いね。寒いね……」

現在、11月末ということもあり寒さが厳しい。窓付きは、誰に向かって言うのでもなく寒いね寒いねと、延延と繰り返して連呼している。僕は、そんな窓付きの側でそれをずっと聞いている。

「ねえ……。」

ギュッと、掛け布団を強く握るのがわかった。

「パパは、どこに行ってしまったの？」

そう、僕は知っている。

窓付きの優しかったお父さんは死んでしまったのだ。窓付きが、薄暗い部屋に閉じこもるようになったのは、ちょうどその頃からだったかな……？



## 【パパ日記】

大学生のときだったな。俺は、薬剤師になるのが夢だったんだ。ちゃんと大学にも通って、勉強もして、当時は夢に向かって着実に進んでいたんだよ。僕は、人見知りであり人と話さないんだけど、俺の妻になる人とだけ気兼ねなく触れ合うことが出来ていた。

ただ、3年前だったか。窓付きが11歳の時に妻がこの世を去ってから、俺は人が変わったんだよ。「俺には、親もいない。もう窓付きしか残っていない」そう思うようになってから、窓付きに対して俺の妻と同じような接し方をするようになったんだ。何度やめようと思ったかわからない……

でも、彼女が生きているような気がして止まらないんだよ。自分の娘なんだ、笑ってしまうだろ？普通なら、笑ってしまうんだよ。

あっ……そういえば。

たしか、『初めて』をしてからだったかな？窓付きが、部屋に閉じこもったのは。

(1)

もう後には引けない。俺自身がそれをよく理解している。

「窓付き……。」

俺は、薄暗い自室で窓付きを待っている。おそらく、窓付きはあの日から俺のことを別人のように感じているだろう。彼女の精神状態を不安定にした原因は分かりきっている。それは、死と言う運命(サダメ)と自分だろう。

だが、やめるわけにはいかない。窓付きが離れてしまえば、俺はこれから先を生きていく気力が無くなってしまうからだ。どうしようもない。しかたないことだ、俺のせいなんかじゃない。俺は何も悪くない。

もう。来ないかな……？

俺は、自然に窓付きの小さいときのことを思い出していた。

あの頃は、家族3人で幸せな生活を続けていた。この幸せな日々が永遠に続くと、その時は思っていたんだ。だが、どうだろうか？

たった、一人居なくなっただけでこのザマだ。今になって分かることだが幸せっていうのは、永遠とか壮大なことじゃなくその時一つ一つのことなんだろう。まあ、今に気づいても遅いのだが。

「窓付きが泣いている。」

壁越しに聞こえる泣き声は、全ての事柄を否定しているようにも聞こえる。

以前、窓付きの部屋を覗いたことがあった。その時に偶然だったのだが俺は、『自分で自分を傷つける』窓付きを見てしまった。何本も何本も、腕に赤く滲んだ細い傷を付けて。

ああ……思い出すだけで心が重くなってくる。

その時は、言葉を完全に失って扉の前でしゃがみこんでしまった。片手で口と目を覆い隠してもボロボロと涙が床に山を作ってしまう。

俺は死んだほうがいいのか？そうすればあの子は、シアワセニ……

そんなことを思っていると、廊下から鈍くゆっくりとした足音が聞こえてきた。

俺にはお前しかいない。お前が俺の部屋に来てくれるたびに、嬉しくてたまらないんだ。

廊下の足音が止まった。

「ま、窓付きか……？」

「うん。そうだよおじさん。」

もう。出す涙すらない。

「風邪ひくぞ……廊下で立ってないで早くおじさんのベットに入りなさい。」

「ううん……私の居場所はこっちじゃないの。おじさんとは、お別れだね……今までありがとう。」

さようなら……そして、おやすみなさい。

窓付きの心の中に私はいなかった……。

